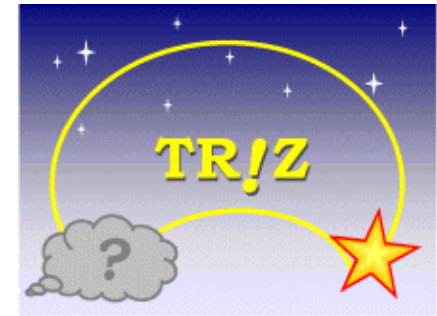


ICCI2018 (創造性とイノベーション 国際会議)
日本創造学会 & 近畿大学 ICMI 共催
2018年9月10日(月) ~ 12日(水)
大阪国際交流センター (大阪市)



「自由」vs「愛」と「倫理」: 人類文化の主要矛盾とその解決の方向

2018年 9月11日

中川 徹

(大阪学院大学 名誉教授)

はじめに : (趣旨とアウトライン)

本研究は、輻輳した社会的な問題に、科学技術分野での「創造的な問題解決のための方法論」を適用し、人類文化の根本にある矛盾とその解決の方向を明確にした。

(1) 「創造的な問題解決のための一般的な方法論(CrePS)」を作った。

各種の創造性技法、問題解決技法を統合して、「6箱方式」を作った。
技術分野、ビジネス分野などに限らず、一般的に使える。

(2) 実際の社会的な問題に適用することを試みた。

「日本社会の貧困」をテーマに選んだ。
藤田孝典著『下流老人』(2015)を、「見える化」した。
読者レビューの根底に、「自己責任論」と「助け合い精神」との対立を見た。

(3) 根源には、「自由」と「愛」の葛藤・対立(=矛盾)がある、と認識した。

「自由」= 自分で判断・行動し、「生きる」こと。人類文化の第一指導原理。
「愛」= 子と家族を愛し隣人を愛して、「助け、守る」こと。人類文化の第二指導原理。
「自由」と「自由」、「愛」と「愛」、「自由」と「愛」が対立・矛盾する。
=> 「自由 vs. 愛」を「人類文化の主要矛盾」と名付けた。
両者を支え、動機づけ、調整するもの => 「倫理」(人の道、「良心」)

(4) 基本仮説： 主要矛盾(「自由」vs「愛」とその解決の方向づけ(「倫理」) を得た。

- ・ 第一指導原理「自由」は、自分の判断で行動し、競争に勝つことを目指す。
文化的・社会的な創造・革新をもたらせるが、勝者の支配と保守をも生む。
- ・ 第二指導原理「愛」は、人を愛し、奉仕し、みんなの幸福を目指す。
革新をもたらせるが、一方で「みんな(身内)」を守るために統制・保守をも生む。
- ・ より根本に第0指導原理「倫理」があり、人の心の内奥で、人のあり方を示す。
すべての人に幸福を追求する権利があるという「基本的人権」の理解が中核。
- ・ 「自由」vs「愛」が人類文化の主要矛盾であり、歴史を通じて、いまだ解決できていない。
- ・ 主要矛盾を解決する鍵は、「自由」と「愛」を動機づけ、調整できる「倫理」である。
- ・ 「倫理」の根源は、「善悪を判断する先天的な心(=「良心」)である。

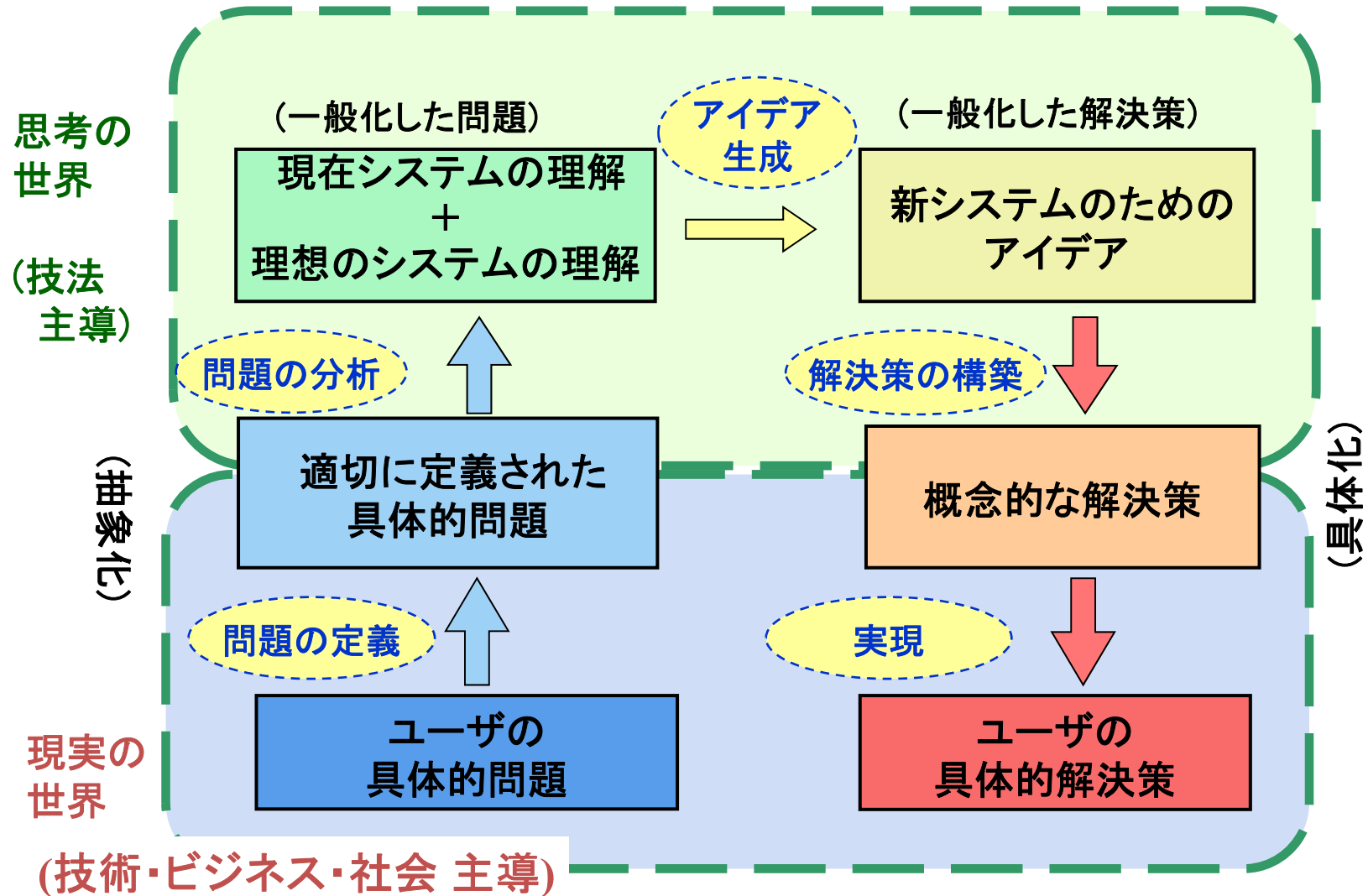
(5) 従来(特に倫理学) と対比して、本件の基本仮説の検証を試みた。

本研究の仮説	新規性	妥当性	有効性
主要矛盾 = 「自由」vs「愛」	○ (?)	○	○
矛盾の解決方向 = 「倫理」	○ (?)	○	○
「倫理」の根源 = 先天的「良心」	○ (?)	○	○
「善」 = 主要3指導原理の全体が示す方向	○	○	○

(6) 本研究は、科学技術分野での創造的問題解決の方法論を社会問題に適用して、人類文化の根底に関する(哲学的な)基本仮説を創出した。

創造的問題解決の新しいパラダイム (CrePSの「6箱方式」)

(中川 徹、2006)



科学技術分野で、各種の創造性技法、問題解決技法を統合して、「6箱方式」を作った。
広い分野に使える。システム思考、メカニズムの理解、矛盾の扱い、抽象化思考に優れる。

創造的問題解決の方法を 社会的問題に適用する

社会的問題は技術的問題よりも、幅蕪した大きな問題である。

非専門家／素人である自分がどのように、取り組みればよいか？

最初に、(日本社会における)「高齢者の貧困の問題」をテーマに取り上げた。

藤田孝典著『下流老人』(2015) (221頁)を テキストに選んだ。

その論旨を「見える化」(図示)し、24頁の冊子を作った。

問題の状況を、構造的に見ることができる。

このベストセラーの本に関する Amazon での読者の書評 82件には、多数の高評価(星5、星4)がある一方で、多数の酷評(星1、星2)がある。酷評の多くは、「貧しくなったのは、その人の責任だ。社会の責任でない」、

「社会福祉に頼るのは甘えだ」などというもの。

感情がはっきり現れているものが多い。

わたしはこれらへの応答を書いてみて、考察した。

私が考えたこと:

「貧困」に関する議論の根底には、人々の心理・理解に大きな未解決のことがある。

競争社会における「勝ち負け」と「助け合い」に関わる考え方が、未解決である。

一方で、競争は、勝ち負けの世界、自己責任だという世界。
もう一方で、助け合い、協力、生活保障、福祉を考える世界。

人々の社会的な理解において、この二つの両立が、共通の理解になっていない。

社会的思想、社会倫理として十分に解明されていないからだ。

突き詰めると、「自由」と「愛」という重要な標語に到達する。

この「自由」の考え方と、「愛」の考え方とが対立していて、

その調整のしかたが、共通認識になっていない。(日本でも世界でも)

これは、個別事例の対立ではなく、もっともっと深い問題である。

==> 「自由」と「愛」の対立は、実は「人類文化の主要矛盾」であり、
その矛盾を解決することが、「人類文化の主要課題」である。

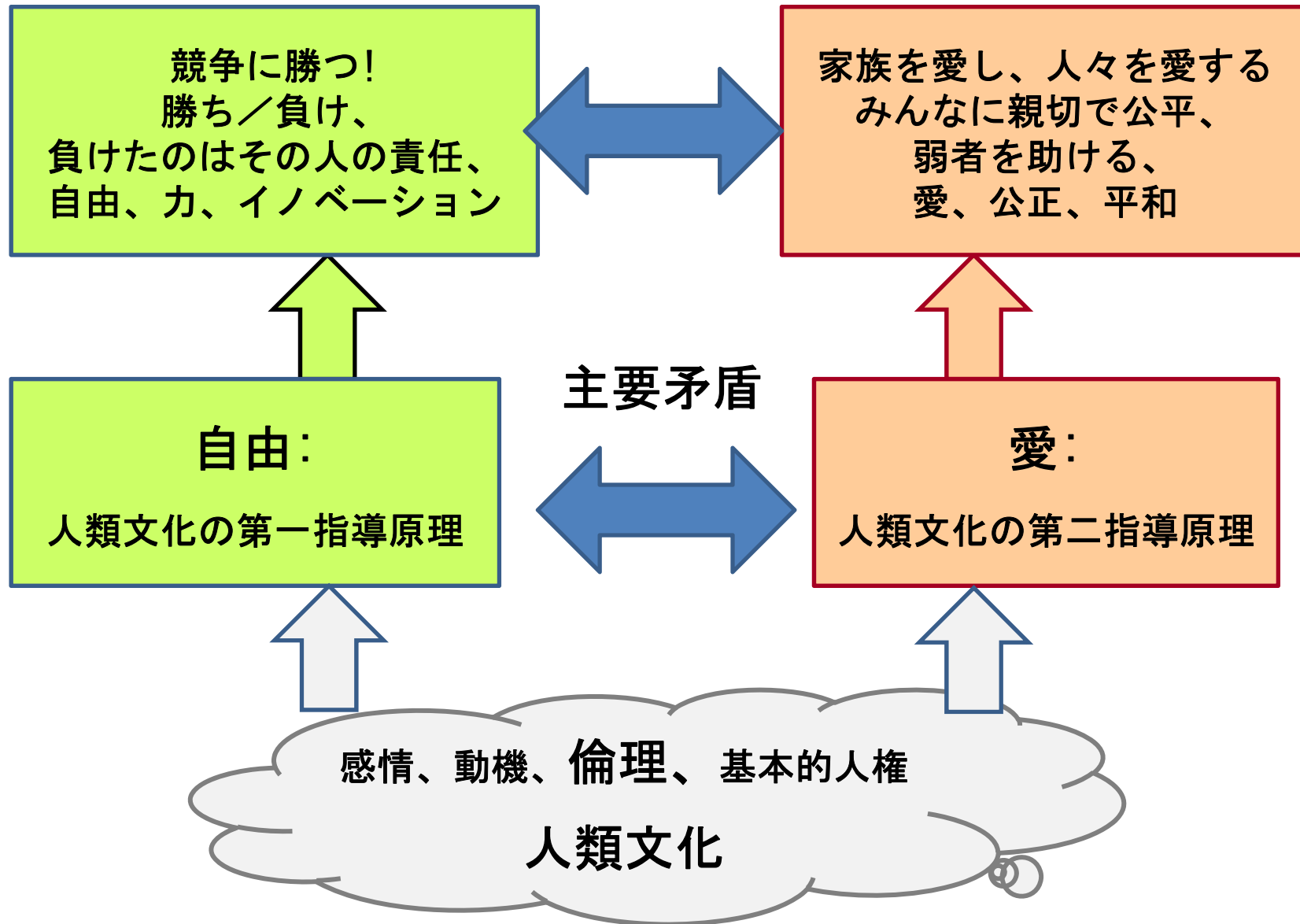
基本仮説：「自由」vs.「愛」が人類文化を貫く主要矛盾

中川 徹 TRIZシンポ2016

- (1) 人類の文化は、「自由」を第1指導原理とし、その伸長を主要目標とする。
各人が、自分で判断し、行動し、「生きる」ことである。
「自由」は、(自然的、社会的な)「競争に勝つ」ことを目指す。
一人の「自由」と他者の「自由」とは、必然的に衝突(矛盾)する。
- (2) 人類の文化は、「愛」を第2指導原理とし、その普遍化を主要目標とする。
各人が、その子を愛し、家族を愛し、隣人を愛して、「助け、守る」ことである。
「愛」は、「自由」を自制して、「自由」同士の衝突を無くすことを目指す。
「愛」は、「身内」を助け・守るために、「外」からの攻撃に対抗する。
それは、一つ上の社会レベルでの「自由」と「競争」を出現させる。
- (3) 「自由」vs「愛」が、「人類文化を貫く主要矛盾」である。
「自由」同士、「愛」同士、「自由」と「愛」の間に、さまざまな矛盾がある。
- (4) この「自由」と「愛」との両方を包含して動機づけ、その間の調整を行う
指針として人類文化が獲得してきたのは、「倫理」である。
平たく言えば、「人の道」、「良心」。「倫理」の根幹部は先天的であろう。
「基本的人権」の概念は、この「倫理」の一部が明確化されたもの。

「自由」vs「愛」: 人類文化の主要矛盾

2016.10.25 中川 徹



(5) 人類は、さまざまな社会システムを形成し、高度な文化を生んだ。
しかし、「自由」vs.「愛」の「主要矛盾」は、まだ解決されていない

経済、政治、・・・、言語、宗教、社会思想、科学技術、芸術、・・・
「主要矛盾」は至るところに在り、生まれ、大規模化し、深刻化している。

(6) 「人類文化の主要矛盾」の解決を困難にしている理由:

(a) 最も基本の個人(間)のレベルで、「自由」、「愛」、「倫理」のありかたが明確でない。

人間性における「欲」「悪」の問題も。人々が、知性よりも感情で動かされる。
人々が出生以来のさまざまな体験で考えが形成・制約される。

(b) 種々の社会組織における「自由」、「愛」、「倫理」のありかたが明確でない。

グループ、組織(企業、政党など)、地域共同体、国 など。
これらのありかた(社会的「倫理」)の理解が世界的に共有されない。

(c) 個人や組織が自己の利害(「自由」)を主張して、(社会的)「倫理」に
反する行動をとり、それが社会的な「勝者」になることがある。

社会的「勝者」が、自分に都合がよい社会システムを構築する。

(d) (c)の状況が、小から大まで至る所にあり、歴史的な積み重ねをもっている。

(いつの時代でも) 社会システムが(社会的)「倫理」に合わない面がある。
いままで虐げられていた人々が(c)の行動をとり、対立・闘争が起こる。

この基本仮説をさらに深く考察した。

個人(および個人間)のレベルを中心にして、

「自由・愛・倫理」の関係を矛盾とその克服の観点から考察する。

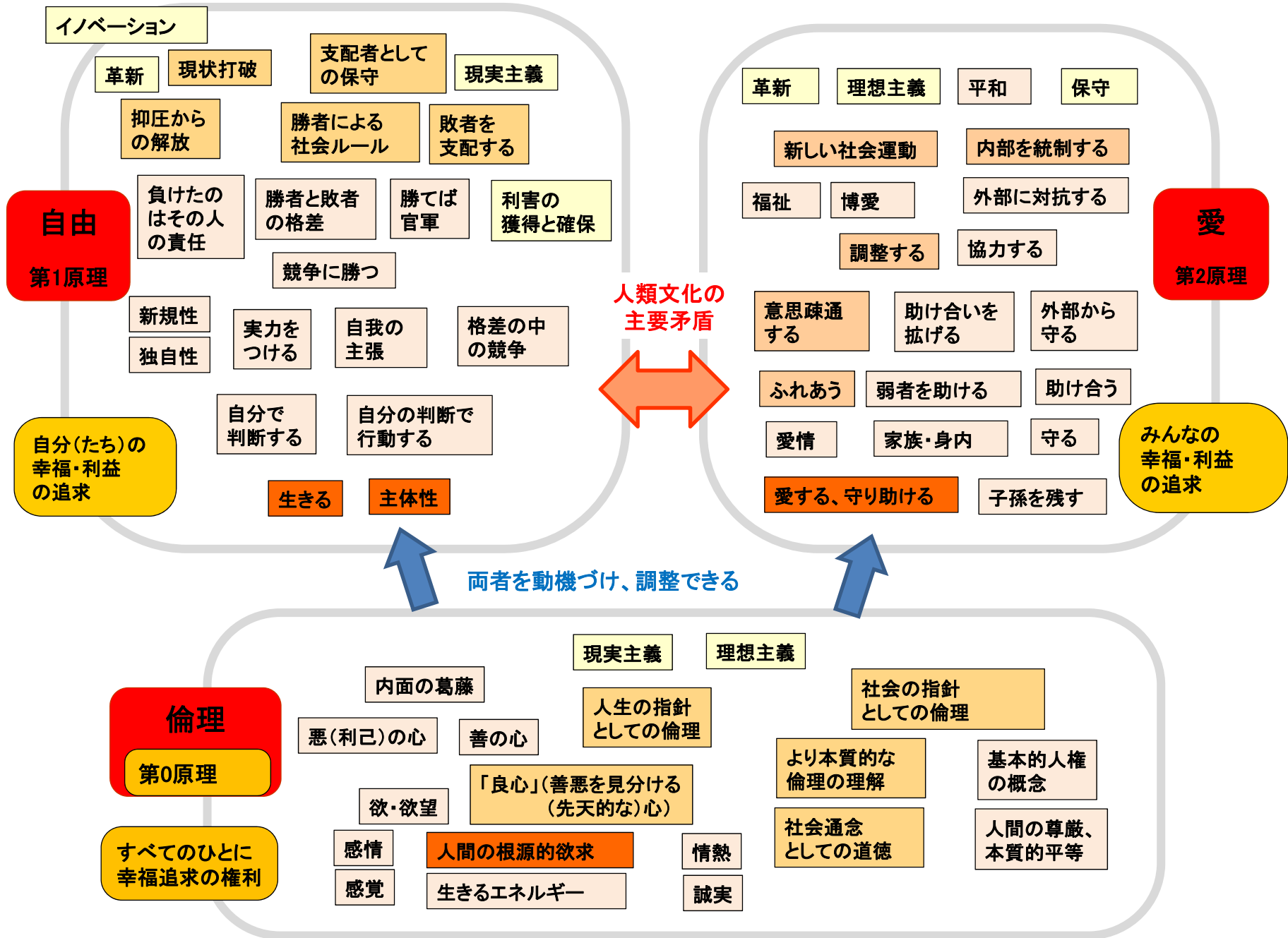
関連するキーワードを集め、札寄せ法でその構造を「見える化」した。

「自由・愛・倫理」の内部構造と相互関連が見えるようになる。

また、詳細な図から、エッセンスを抽出して、図示した。

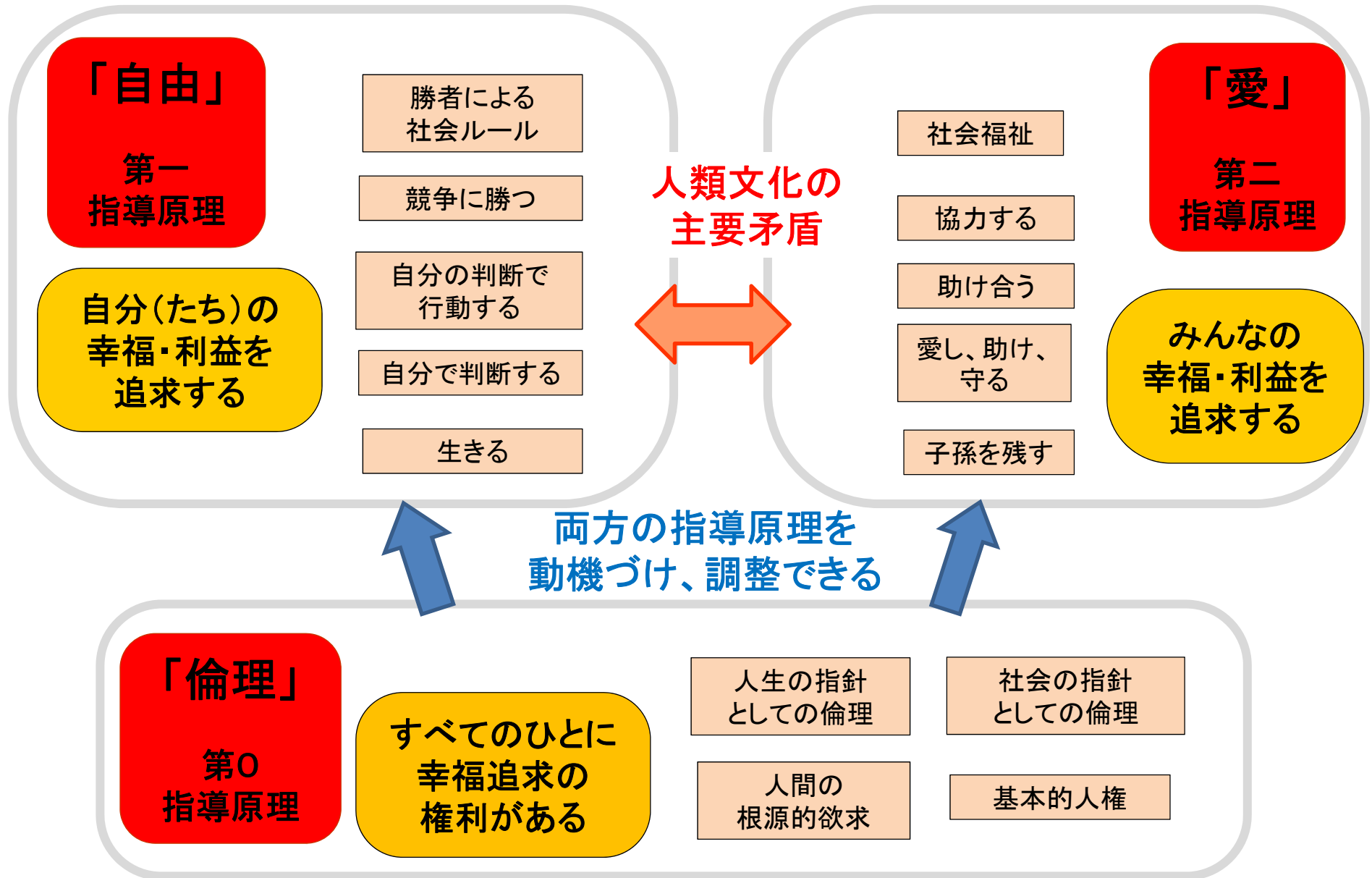
得られた考えを、詳細に文章化した。

人類文化の主要矛盾：「自由・愛・倫理」の構造（個人(間)のレベルを中心に）



人類文化の主要矛盾：「自由・愛・倫理」の構造

(個人(間)のレベルを中心に)



人類文化の主要矛盾:

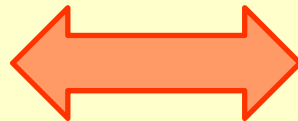
「自由・愛・倫理」の構造

(個人(間)のレベルを中心に)

自由 (第1指導原理)

自分(たち)の
幸福・利益を追求する

人類文化の
主要矛盾



愛 (第2指導原理)

みんなの
幸福・利益を追求する

両者を動機づけ、調整できる

倫理 (第0指導原理)

すべてのひとに
幸福追求の権利がある

「自由vs愛」の主要矛盾 と 「倫理」

本研究の基本仮説

1. 人類文化の第0指導原理：「倫理」

1.1 「倫理」：人の内面の根底にあり、善悪の考えと、 人生・社会の指針を示す。

人の内面の根底は、感覚と感情をベースにし、「欲・欲望」を含む。
それは「善の心」の基でもあるが、「悪の心」にもつながる。
何が「善」で、何が「悪」であるかを示すのが、「倫理」である。

1.2 「倫理」は後天的(歴史と社会に依存)だが、 「良心」は先天的である。

「倫理」の中身(何が「善」で何が「悪」か)は、時代と社会で異なる。
「倫理」は社会が作り教えたもの。人類文化の歴史と共に発展してきている。

「良心」= 「内心において善悪を見分ける心の能力」 が人類共通で先天的。
(通常は、「内心にある「善の心」」の意味に使うが、本研究で定義しなおす。)
(参考：赤ん坊はどこで育てられても、育てられた環境の言語を話せるようになる。 -- 言語獲得能力は先天的、言語そのものは後天的。)

1.3 「倫理」は人類文化の土台であり、 「人類文化の第0指導原理」と名付ける。

人類文化は「倫理」を土台にして、「自由」の伸展と、「愛」の拡張を目指してきた。

「自由」と「愛」の中のさまざまな対立・矛盾を調整する拠り所は、「倫理」である。

1.4 「倫理」の中核概念は「基本的人権」である。

旧来使われてきた「道徳」という語には、旧来の身分関係・上下関係を前提とした社会ルールへの「従順」のニュアンスが強い。

しかし、人類文化の歴史の中で「(人間の本質的な)平等」という概念が得られた。

それを中心にした「基本的人権」が、現代の人類文化の「倫理」の中核概念である。

1.5 第0指導原理「倫理」の本質 =

「すべての人に幸福追求の権利がある」

2. 人類文化の第1指導原理: 「自由」

人類の文化は、「自由」を第1指導原理とし、その伸長を主要目標とする。

2.1 「自由」 = 「自分で判断し、自分で行動して、生きる」こと

自分で「主体的に」ベストと思う判断をし、行動する。その責任は自分で負う。

どの行動にもさまざまな影響やリスクがあるから、成功することも失敗することもある。

それを承知で、よく考えて(判断し)行動することが、

個人の生きる可能性を最大化し、人類文化を新たに発展させていく。

2.2 「自由」同士が対立: 必然的に「競争」が起き、 「競争に勝つ」努力をする

各人の「自我の主張」(「自由」)は、「欲しいもの」が有限だから、必然的に対立する。

「競争」が現れる。「自由」は、「競争に勝つ」ことを目指す。

知力・経験・体力・資源などを予め準備し、適切に判断・行動しなければならない。

「勝者」は自分が欲していたものを獲得し、「敗者」はそれが得られない
(最悪の場合には自分の生命をも失う)。

「競争」により「強い者(実力を持つ者)」を勝ち残らせることは、生物界の大原則。

2.3 「競争社会」では「格差」が拡大していく

「競争に勝つ」ことが目標になると、「競争」はどんどん熾烈になる。

(例: 受験競争、商品の価格破壊競争。人間の金銭欲には際限がない。)

「競争」が激しくなると、「弱肉強食」のぎすぎすした社会になる。

(競争を繰り返すと)勝者と敗者の立場の差が「格差」として拡大していく。

2.4 「社会的勝者」による「支配」: 新しい「社会ルール」とその「保守」

(いくつもの)競争に勝った「社会的勝者」は、「社会的敗者」を「支配する」。

「勝者」が自分たちに都合がよいように、「社会ルール」を作る。(「勝てば官軍」)

(個人レベルでの例: 子供の中でのガキ大将、少年期に顕著ないじめ、など)

「勝者」は、自分の体制の温存・現状維持を望む。(「保守」、「現実主義」の立場)

2.5 支配された状況からの「解放」と「革新」の運動

一方、「社会的敗者」は、支配・抑圧された状況から「解放」されることを望む。

現状の打破、現在の社会ルールの「改革」が、「自由」が目指す目標になる。

「革新」、「理想主義」の立場である。「革新」が歴史の発展を特徴づけてきた。

2.6 人類文化における「革新」: 「自由」の意義

科学技術や芸術などでも、「自分で判断し、行動する」ことが、文化的な発展を生む。

独自性、新規性のある科学認識や技術や芸術、「イノベーション」を生む。

「自由」が人類文化を発展させるための重要な指導原理であると認められる。

2.7 第1指導原理「自由」の本質 =

「自分(たち)の幸福・利益を追求する」

3. 人類文化の第2指導原理:「愛」

人類の文化は、「愛」を第2指導原理とし、その普遍化を主要目標とする。

3.1 「愛」＝「各人がその子を愛し、家族を愛し、隣人を愛して、 助け、守る」こと

その原形は、母の子に対する「愛情」。

生き物としてのヒトがその子孫を残すために、子を守り育てる本能的行為。

「愛」を、家族・隣人に及ぼし、さらに広くすべての人に向けることが、普遍化の目標。

3.2 「愛」は、「助け合う」、「与える」、「協力する」。

「愛」は、弱い者、困っている者に対して、助ける。

さらに相互に助け合う、双方向に広く助け合うことが「愛」の本来の目標である。

そのために、人に触れ合い、コミュニケーションをし、お互いを理解して、「協力する」。

3.3 「愛」は「調和」を求め、一部の「自由」を抑制して、調整する。

「愛」は、人々の「調和」を求めるが、人々の「自由」の主張の違いが大きいと困難に。自己主張する人を「なだめ」て、グループ内に留まらせるのが一法。一人の主張を認めて、他のメンバーに理解を求める（「なだめる」）のが別法。「愛」の「調和」志向が、グループメンバーの「自由」の間に「妥協」を作ろうとする。

3.4 「愛」は、多様性（多様な「自由」）を尊重した「協調」を見出す。

グループの各メンバーが互いの主張や利害の違いを認めたくえで、相互に相手を尊重し、グループとして「協調」、「相互協力」する。互いの違いが相互の弱点を補い、よりよくしていくことを認識すると、実現できる。また、一部の自己主張（「自由」）が新しく有益な場合には、その部分を従来グループから「独立」させ、（緩い）連携を持つことも有益。

3.5 もう一つの「愛」の原形： 性愛・恋愛・結婚

「愛」のもう一つの原形には、子孫を作る生殖のための性愛がある。

生き物としての本能の一つだから、性欲も対象者選びも本能的・感情的な面が強い。

排他性・支配欲が伴い、相手を巡って他者と強い競争関係になることも多い。

良い伴侶を得て、結婚し、結婚生活を全うすることは、人生の大きな課題であり、社会的安定の基礎でもある

3.6 「愛」は「身内」を守るために、「外部に対抗する」性質がある。

守るべきメンバー（「身内」）を明確にし、外部に対して「壁」を作り、「対抗」する。

結束するために、「身内」の意見や行動を統制する（「自由」の束縛）ことがある。

「保守」、「現実主義」の立場である。

3.7 「身内」を守ろうとする「愛」は、 一つ上の社会レベルで「対立」を作り出す。

（例：一つの国民の「愛国心」と隣国の国民の「愛国心」とが戦争を引き起こす。）

3.8 「博愛」：弱者の救済、「格差」の是正による、社会「革新」の運動

すべての人に「愛」を及ぼすこと（「愛の普遍化」、「博愛」）は、「愛」の本来の目標。社会の「格差」の中で恵まれない人々（「弱者」）に、「助け」を及ぼそうとする。現実社会をそのように変えていこうとするのは、「革新」と「理想主義」の立場である。その視野が国際的・世界的になるとき、「平和主義」につながる。

3.9 第2指導原理「愛」の本質 =

「みんなの幸福・利益」を追及する

「みんな」として認識されている人々の範囲（広い意味での「身内」）が問題。
（例： 家族、グループ、会社、地域、国、など）

愛の対象を広げて普遍的にすることが、第2指導原理「愛」の目標である。

この目標のためには、「愛」自身がその理解および感情の改革を、
数レベルにわたって達成しなければならない。

4. 「自由」と「愛」の対立・矛盾

「自分(たち)の幸福・利益」(「自由」と
「みんなの幸福・利益」(「愛」との 対立・矛盾。

4.1 ある人の独自の判断と行動(「自由」)を、別の人「愛」が止めようとする。

周りの(特に保護的・指導的立場の)人が、「危うい、誤っている」と考える場合。

「あえてリスクを取り、行動することが、将来の成功の糧だ」という主張(「自由」と、
「失敗は目に見えている、ダメージが大きいからやめよ」という助言(「愛」)の対立
どちらが適切かは、場合によって異なる。

4.2 「助け合い」「協力」を求める「愛」に、「自由」が協力を拒否する。

「みんなの幸福・利益」のために「助け合い」や「協力」を求める「愛」に対して、
メンバーが「自分の利害に合わない」として拒否する(「自由」)場合。

「自由」は「自分の幸福・利益」を最大限に求めるから、この対立はしばしば起こる。

4.3 「勝負」「戦い」での決着(「自由」)を、「愛」は「平和的に」避けようとする。

「自由」同士が「競争」「戦い」によって「勝ち負け」をつけようとするのに対して、「愛」が、「勝負」「戦い」を避けて、「調整」「協調」「平和」の実現を望む場合。

「愛」が「調停者」として双方から信頼され、「調停案」が双方を納得させる必要。

4.4 「社会的勝者」が作る「社会ルール」に、「愛」が異議を申し立てる場合

「社会的勝者」の「社会ルール」や支配体制(「自由」)が、「みんなの幸福・利益」「博愛」に反するとして、「愛」が反対する場合。

「愛」の反対の意思表示は、新しい社会運動になることがある。

4.5 「抑圧からの解放」の運動(「自由」)に、「愛」が反対する場合

「社会的敗者」が「抑圧からの解放」を掲げて、「革新」の運動を起こす(「自由」)とき、「愛」が、その趣旨には同調しても、その運動の目標や手段が「みんなの幸福・利益」「博愛」に反するとして反対を表明する場合。

4.6 「愛」が「身内」の団結を求めて、メンバーの「自由」を束縛する場合

「外部」からの脅威や攻撃に対抗するために、「愛」がその「身内」の団結を求め、メンバーの「考え」や「行動」を統一・制約しようとする(「自由」を束縛する)場合。

4.7 「愛」の「身内意識」が、外部の人の考え・行動(「自由」)を排除する場合

「愛」の「身内意識」が強く、偏狭である場合には、「身内」以外の人にははじき出され、「外部の人」の「考え」や「行動」(「自由」)が認められず、対立が起こる。

5. 「自由」と「愛」に対する「倫理」の役割

「倫理」は、「自由」と「愛」の両方を「動機づけ」、
「自由vs愛」の主要矛盾を「調整」する。

5.1 「倫理」自身の理解が、人類文化の歴史の中で発展してきている。

「何が悪で、何が善か」を示し、「悪から善に向かわせる指針」が「倫理」である。

「倫理」の中身は、時代と社会で異なり、人類文化の歴史と共に発展してきている。

各個人は「倫理」を後天的に学ぶ(社会から教えられる)。

5.2 個人の心の中で「倫理」が適切に理解され、実践されることが重要。

個人の心の中で「倫理」が適切に理解され、実践されていることが、

「自由」と「愛」が本来の姿で (各個人と社会により) 実践されていくために重要である。

「自由」の中、「愛」の中、「自由」と「愛」の間にある対立・矛盾を緩和・解決する鍵である。

5.3 不十分な「倫理」(の理解)は、「自由」の精神・実践を損なう。

「主体性」を損なう <== 消極的、無気力、他人依存、無責任、付和雷同、など、

「独自性、新規性」を損なう <== 先例踏襲、ありきたり、二番煎じ、模倣、など

「挑戦的」を損なう <== 無難、萎縮、責任回避、など。

「競争」が不適切に <== 裏口入学、ドーピング、判定操作、ルール違反、買収、収賄。

「自分の利害の獲得」を不正に <== 脅迫、買収、文書偽造、詐欺、強盗、殺人、など。

「新しい社会ルール」作りを不適切に <== 奴隷制、身分制度、制限選挙、植民地制。

「現状打破」の運動を不適切に <== テロ、武装蜂起、弾圧、言論統制、など。

5.4 「自由」の土台となる「倫理」:

「基本的人権」と「本質的平等」の概念

「自由」が尊重されるためには、

その「考え」や「行動」が、「倫理」に沿っていること、

人間の「悪の心」ではなく、「善の心」から出たものであることが望まれる。

実際的な指針は、

「自由」の主張と競争の場に、「基本的人権」の順守を掲げること。

すべての人々の「基本的人権」を守ることを

「自由」の主張とその追求の大前提にする。

旧来の「道徳」が持つ、「服従・従順」を第一とする「倫理」観を脱して、

「人としての本質的な平等」を大前提とする「倫理」観に進むことである。

「画一的平等」ではなく、「人間の本質的平等」の概念と実践法の理解が必要。

5.5 不十分な「倫理」(の理解)は、「愛」の精神・実践を損なう。

「愛情」を損なう <== 無関心、嫌悪、冷酷、虐待、など、

「助ける」を損なう <== 無視する、放置する、など、

「守る」を損なう <== 放置する、見て見ぬふりをする、など。

「調整」を損なう <== 非協力、無理解、冷淡、利己的、固執、拒否、など

5.6 「愛」の土台となる「倫理」:

心の中の「愛」と「広い心」

「愛」は、すべての人が持っている「心の優しさ」(「倫理」の一側面)を基礎とする。

それによって、人々と助け合う、協力する、調整することができる。

また、利己的な「自由」の主張を避け、「自由」と「愛」の対立要因を減らすことができる。

「愛」は、その対象を広げ、普遍化することを目指す。

その障害になるのは、「愛」自身のもつ「身内」意識(対象者を限定する意識)である。

「人間としての本質的平等」の「倫理」を持ち、人々とのコミュニケーションに努め、
社会・世界の状況を理解することが大事である。

5.7 経済的「格差」の問題と「富の再配分」の問題の認識

もう一つ注意すべきは、人間の欲望、特に金銭欲に際限がないことである。
現代世界では、金銭が「社会的勝者」を決める最大の要素である。
「富める者」こそ「社会的勝者」であり、彼らに都合がよい社会制度になっている。
それが資本主義経済であり、それを中核とした資本主義社会である。
これが日本でも世界でも大きな「格差」を生み、沢山の問題を引き起こしている。
この点を変革して、「富の再配分」を組み込んだ社会制度にするべきである。
これは「自由」のあり方の問題であり、「愛」の、「倫理」の問題でもある。

**本研究の基本仮説について
その意義を検討する**

基本仮説の要点はつぎの三つ 十一つである

(a) 人類文化の主要矛盾 = 「自由」vs「愛」の矛盾

人類文化の第1の指導原理が「自由」であり、第2指導原理が「愛」である。
しかし、その二つの指導原理の内部とその間に大きな矛盾が内在している。
その矛盾の解決が人類文化の主要課題であるが、歴史を通じて解決できていない。

(b) 主要矛盾の解決の方向: = 「倫理」が解決の鍵

「倫理」が人類文化の最も根底にある第0の指導原理である。
「倫理」が、「自由」と「愛」の両方を動機づけ、両者の矛盾を調整・解決する鍵である。

(c) 「倫理」の根源 = 先天的な「良心」

「倫理」は「善悪の判断の指針」を示すが、後天的に社会から教えられる。
「倫理」の根源は、「内心において善の方向を示す先天的な心有能力」である。
この先天的能力は、生き物としての進化の方向づけを体現している。

(d) 「善」 = 人類文化の三つの主要指導原理の全体が示す方向

「倫理」の深化、「自由」の伸長、「愛」の拡張(普遍化)を同時に進めること。
これらの一部分だけでは(矛盾を増大させるから)「善」でない。
「倫理」、「自由」、「愛」は、どれも個別には「善」でない。

これらの基本仮説の、(新規性)、妥当性、有効性を検討する。

注: 先行研究を見つけられないが、無いことの証明は難しい。

「倫理」の根源 (基本仮説(c))について:

- ・ 各社会において受け入れられている「常識的道德規則」(常識的倫理)は、親や社会から後天的に教えられたものである。
社会や時代によって違うから、人類文化の「倫理」の根源とはみなせない。
- ・ メタ倫理学は、「べき」という語を含む道德宣言文を、「である」で記述される事実宣言文だけから導くことは論理的にできない」との結論を得た。
すなわち、何らかの「べき」の概念が、先天的に必要なことを示した。
- ・ 本研究では、人の内心に、先天的な善／悪判断の心の能力があることを想定し、これを「良心」と呼んだ。この能力を基に、後天的に「倫理」を習得する。
(言語習得の先天的な能力を基に、後天的に任意の母語を習得するのと同じ)
- ・ その先天的能力は、進化の結果として、DNAに組み込まれたものであるから、生き物としての根源的な能力(指導原理)に対応する。それはつぎの三つと考える。
 - (a) 生きること、生き残ること。すべての力を使って、自分で。
 - (b) 子孫を作り、増やすこと。生殖により、子どもを育て、など。
 - (c) 種を繁栄させること。意思疎通し、メンバーを助け、メンバーを殺さず、など。
- ・ これらは、人類文化の指導原理の「倫理」の根源であり、「自由」、「愛」をも含む。

以上は、基本仮説(c) の必要性、妥当性、有効性を示している。

基本仮説(b): 矛盾解決の鍵としての「倫理」について

- ・ 「倫理」は、善／悪の判断、「善」への方向づけを示す(示そうとする)ものである。
「人のあり方」、「人生の指針」を示すものと、広く理解されている。
- ・ 「倫理」の理解や実践が不十分だと、「自由」も「愛」もその精神・実践が損なわれる。
- ・ 「倫理」の中身を積極的な表現のキーワードで書き並べてみると、
誠実、主体性、積極性、情熱、勤勉、努力、謙虚、感謝、公平、
愛情、親切、共感、信頼、などである (もっともっと書き並べることもできる)
- ・ これらは、個人の内面や振る舞いのあり方、対人関係のあり方に関する指針である。
- ・ この他に、「殺すな」「盗むな」「姦淫するな」など、「社会的な掟(ルール)」の面がある。
- ・ この面は現代社会では、「基本的人権」の概念として明確に理解されてきている。
「すべての人が、人として本質的に平等であり、生命・自由・幸福追求の権利を持つ。」
- ・ 「すべての人が幸福追求の権利を持つ」という「倫理」の指導原理が、「自分(たち)の幸福を追求する」(「自由」と「みんな(広義の身内)の幸福を追求する」(「愛」)の二つの指導原理よりも根本にあり、両者の前提をなすべきことは、明確である。
- ・ 「倫理」の精神が、「自由」の精神、「愛」の精神を根拠づけ(動機づけ)、
「倫理」の指導原理(特に「基本的人権」)が、「自由」と「愛」の指導原理の実践を調整する(だから、矛盾を解決する鍵になる)、ことはよく理解される。

「倫理」の性格の理解： 義務・規範・法則ではなく、「指導原理・方向づけ」

- 従来、「倫理」・「道徳」は、「義務」・「規則」・「規範」など、「守るべきこと」と理解された。あるいは、「原理」・「法則」などとして、「正しいこと」と理解された。
 - 注： 功利主義はやや特殊で、人々が求める究極のものを「善」と定義し、それが「快」(＝広義の望ましい感情)であるとし、行為選択肢の評価基準として、関係者(または自分)に最大の「快」をもたらせることを採用する。評価基準は抽象的であり、具体的な倫理体系・道徳体系を作り上げようとするしない。
- 常に「守るべき」「正しい」倫理体系・道徳体系が模索され、提示されてきたが、社会の変化や、さまざまに異なる状況に対応できないことが多くある。また、その時代と社会の支配層の利害を反映した「社会ルール」の一部をなす。
- 本研究では、「倫理」の性格を「指導原理、方向づけ」と理解する。それは、生き物の進化をベースにした、先天的な「良心」の方向付けである。先天的なものは、書き出すことは困難だが、確固として明確なものである。
- 「倫理」(広義には、「自由」「愛」を含めた「指導原理」の全体)は、根幹は明確で、多面的であり、発展的な「方向づけ」を示し、末端を明示・規定するものでない。
- それらの「方向付け」は、「人類文化の主要矛盾」を内包しており、人間(と社会)のすべての行動は、その場その場での矛盾の解決を必要とする。

基本仮説(a) 人類文化の主要矛盾 = 「自由」 vs 「愛」

- ・ (部分) 先行例: フランス革命の三つのスローガン「自由・平等・博愛」
 - 自由: (王政や貴族制度などの) 身分による支配からの自由
 - 平等: 身分によらない平等
 - 博愛:
 - 現代の各国の憲法に反映され、大きな影響を与えている。
 - しかし、これらの指導原理の構造的関係、矛盾の存在は考えられていない。
- ・ (部分) 先行例: 功利主義者シジウィック: 「(倫理的) 実践理性の二元性」の認識
 - 利己主義: 功利主義の評価基準で、自己の「快」を最大にする行為を選ぶ
 - 普遍的功利主義: 同じ評価基準で、関係者合計の「快」を最大にする行為を選ぶ
 - シジウィックは、利己主義を理論的に棄却できないことを見出し、(倫理判断を行う)
 - 実践理性は、利己主義と功利主義の二つに分裂する」と結論した。
 - 利己主義(≡「自由」と功利主義(≡「愛」)の対立に気がついているが、
 - その根本原因や対処法など考察できていない。「お手上げ」状態)
- ・ その他部分的な観点の先行例はいろいろある。
 - 「自由と規律」、「権利と義務」、「利己と利他」、「自己責任論と社会福祉」、...
- ・ しかし、「自由」 vs 「愛」を人類文化の主要矛盾だと主張した文献は見出せない。

基本仮説(a) 人類文化の主要矛盾 = 「自由」 vs 「愛」

- **新規性:** 従来最も重要で、積極的に評価されていた二つの指導原理が、
(その内部にも、両者間にも) 本質的矛盾を持っていることの認識。

その矛盾が、人類文化を通じて未解決の大問題であることの認識。
- **妥当性:** 矛盾の事例は、あらゆる時代、あらゆる所、あらゆる分野、
あらゆる規模で見られる。

それらを解決しようとして歴史的にできなかった、いまでも増大し、
大規模化し、複雑な問題になっていることは、広く認識できる。
- **有効性:** このような大きな視野で、根源的に問題を理解することは、
本質的な解決策を考えるために、必要であり、有効である。

この問題の本質的な理解が進む／広がることは、人類文化にとって、
大いに望ましいことであろう。

基本仮説(d): 「善」 = 人類文化の三つの主要指導原理の全体が示す方向

本研究では、「善」の概念を最初には定義していない。

本研究の含意を議論してきた結果、筆者はいま、「善」の概念の定義を得るに至った。

「善」とは、人類文化の三つの主要指導原理が指し示す「全体としての方向」である。

すなわち、第0指導原理「倫理」を 深化すること、
第1指導原理「自由」を 伸長すること、
第2指導原理「愛」を 拡張(普遍化)すること、 を共に進めること。

三つの主要指導原理は、人類文化を一貫して並立可能なやり方で指導(ガイド)する一つのシステムをなしている。

それでも、さまざまな状況に適用する途上で、内在する矛盾を解決せねばならない。

この矛盾の解決には、「倫理」と「指導原理」に関する、論理的思考が必要である。

この全システムの(どんな一部でも) 一部だけを取り出して固執する(強く主張する)と、しばしば(内在する)矛盾をより深刻化させ、問題状況を悪化させる。

だから、三つの主要指導原理から成る全体システムの
任意の一部分を「善」とみなすことはできない、

第1指導原理 「自由」(それ自体)が「善」ではない、

第2指導原理 「愛」 (それ自体)が「善」ではない、

第0指導原理 「倫理」(それ自体)が「善」ではない。

「自由」と「愛」と「倫理」が全体として(相互を尊重して)行われることが「善」なのである。

指導原理全体の一部分だけを取り出して不適切に主張する(固執する)誤りの事例:

- 資本主義経済で、ビジネス第一主義で、社会の格差を増大させている(「自由」の固執)
- 利己主義で、個人の利害と個人の財産に固執する (「自由」の固執)
- 政治や組織運営で、少数意見を無視して多数者が決定する (「愛」の固執)
- 「愛」を説く宗教組織において、個人の意思決定や「自由」を無視する (「愛」の固執)
- 社会ルールや社会システムにただ従順に従うように教える (「倫理」の固執)

三つの主要指導原理から成るこのシステムは、

個人レベルにも、全世界のさまざまな社会レベルにも適用できる。

本研究での結論として 理解したこと

人類文化は、三つの主要指導原理の全体系によって導かれる
全体的な方向づけに沿って常に前進するべきである。

すなわち、(第0指導原理)「倫理」を 深化すること、
(第1指導原理)「自由」を 伸長すること、
(第2指導原理)「愛」を拡張(普遍化)すること、を共に進める。

その途上において、人類文化はさまざまな矛盾に直面するであろう。

主要指導原理に内在する「自由」vs「愛」の矛盾から生じてくる諸問題である。

それらを解決する方向づけは、

主として 第0指導原理「倫理」を鍵として見出されるであろう。

「倫理」は「自由」と「愛」の両方を動機づけ調整できるものだからである。

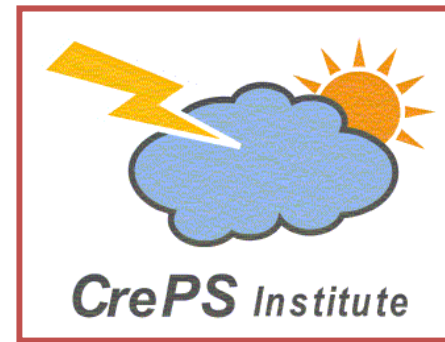
われわれがこれらのことを深く理解し、その知見を世界に広め、

すべての領域のすべての課題に適用していくことが、極めて重要・有意義である。

追記： 本研究に「創造」をもたらせた主要要素

- ・ 科学技術の分野にいた著者が、「人類文化の根底」を考えるとという異質な別分野の問題に取り組み、科学技術分野の創造的問題解決の方法論を持ち込んだ。
- ・ 科学的思考、特に、「6箱方式」による研究プロセス、システム思考、矛盾を扱う考え方、技術進化や生物進化の考え方、などが役立った。
- ・ 読者書評における「自己責任論と助け合い精神の対立」から、「自由の精神と愛の精神との対立」へと、問題の根本に遡った。
- ・ 多数のキーワードを、図的に表示し、その関係や構造の理解を図った。
さらに図のエッセンスを描き出すことにより、本質の理解を進めた。
- ・ 図的考察と、論理的文章記述とを繰り返し、新観点の気づきと論理の発展を促した。
- ・ 「倫理」の中身(善／悪の判断基準)が後天的に教えられるのに対して、
先天的な「良心」を想定し、人類(そして生き物)の共通性を拠り所にした。
- ・ 基本的な仮説を設定し、その帰結を考察して体系化することが有効であった。

以上、(創造的な)新しいアイデアが偶然のきっかけで得られたというよりも、
問題の全体的・論理的な考察をきっかけにして順次発想されてきたと言える。



ご清聴 ありがとうございます

中川 徹 (大阪学院大学 名誉教授)
nakagawa@ogu.ac.jp

『TRIZホームページ』(和文・英文) 編集者
<http://www.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/>

クレプス研究所 代表 『TRIZ 実践と効用』シリーズ 出版